



日本における始原亜目 Micromalthidae の発見

— その生態と形態について —

林 長 閑

始原亜目はナガヒラタムシ科と Micromalthidae の2つの科を含むが、後者は *Micromalthus debilis* LECONTE, 1878, ただ1種が知られているに過ぎない。本種が最初に記録されたのは北アメリカであるが、その後南アフリカ、ハワイ、キューバ、ブラジル、香港からも発見されている。Micromalthidae をチビナガヒラタムシ科、種名をチビナガヒラタムシと命名し、日本における発見までの経過、生態、形態等を紹介することにする。

I 日本における

発見までの経過

筆者は本年(1978)8月中旬、横浜市衛生研究所から横浜市戸塚区にある小学校の給食室で採集された鞘翅目幼虫の同定を求められた。検鏡の結果、特異な形態であったため早速現地を訪れ発生の状況を聞くと共に、発生の源を探した。給食係の話では7月のはじめ頃から8月中旬まで配膳台の上などに粉をまいたように沢山出現し、雑布で拭きとつても翌日はまた出現しているとのことであった。

調査の結果、ステンレスで覆われた配膳台の腐った木からおびただしい数の幼虫を発見した。奇妙なことに木の外で採集された幼虫は有脚であるが木の中の幼虫は少数の有脚を除いては無脚でからだも若干大きかった。しかし胸脚を除いては基本形態が一致するため同一種であることは明らかであった。飼育中のものから8月下旬に10頭余りが成虫となった。出現した成虫・有脚幼虫・無脚幼虫の形態から本種がチビナガヒラタムシ

であることが判明した。

また、以上の結果から2年前(1976)の6月、大阪市御堂筋のイチョウの朽木の中から大量に発見、同定を求められた幼虫もチビナガヒラタムシの無脚幼虫であることが明らかとなった。

本種が古くから日本に分布していたものか、新しく国外から侵入したかについては明確でないが、発生地・発生の状況・生態などから判断して近年になって国外から侵入した可能性は強い。本種はこれまで旧北区からは発見の記録がなく、1962年5月に香港のビクトリア市・カオルーン市で発見(東洋区からの唯一の記録)されて以来の記録と思われる。

II チビナガヒラタムシの生態について(生活史)

本種の幼期における生態を最初に明らかにしたのはHUBBARD (1878)である。彼は1874年ミシガン州のデトロイト付近で腐ったカシの丸太から本種の無脚型幼虫・蛹・成虫を発見し、その食性と共に無脚型幼虫の形態を記載した。その後、オハイオ州・バージニア州・ケンタッキー州・メリーランド州などアメリカ合衆国の中東部で腐ったカ

シ類・クスギ類から本種の幼虫が確認されている。しかし、他の型の幼虫の形態や生活史が明らかになったのは、HUBBARD の記載後、30年余りも経過してからである。

BARBER (1913), CAILLOL (1914), PRINGLE (1938), SCOTT (1935-41) 等によって、この甲虫の生態が

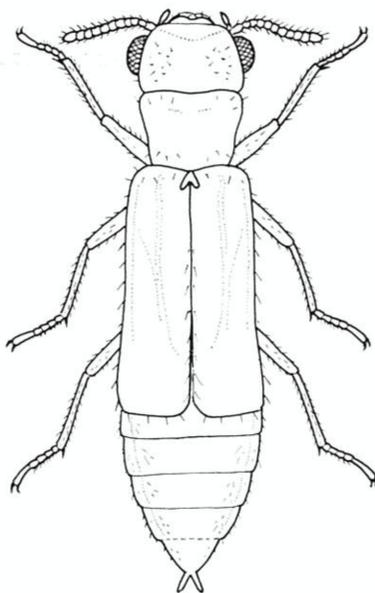


Fig. 1. チビナガヒラタムシ(新称) ♀, 体長約2mm(通常後翅の一部は露出するが図では除いてある)。

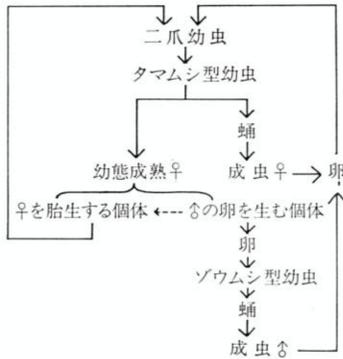


Fig. 2. チビナガヒラタムシの生活史.

調べられた。PRINGLEはBARBERとCAILLOLの生態に関する記事に基づき、生活史を図示しているが、SCOTTの研究を参考にここに新しく生活史を図示してみた(Fig. 2)。

二爪幼虫: Caraboid または Triungulin larva と呼ばれる。ツチハンミョウ科の三爪幼虫(1期または1齢)に外形がやや類似し、爪が2本であるところから筆者はこの名を付した。朽木の外に出て移動するが、この期間は短い。1齢のみがこの形態とも言われるが朽木中に発見されるものは若干脚が短かく、からだも細長い。なお、この形態のものはすべて♀であり、やがて無脚のタマムシ型幼虫となる。

タマムシ型幼虫: Cerambycoid larva と呼ばれる。外形はカミキリムシ科幼虫よりもタマムシ科幼虫に類似するので筆者はこの名を付した。数回(2~3回?)脱皮するが、この型の期間が最も長いと考えられる、腐朽菌に侵された湿った広葉樹・針葉樹の中に穿孔する。やがて幼態成熟♀または蛹♀に変態する。

幼態成熟♀: Paedogenetic larva, Neotenic female, Reproductive form 等と呼ばれている。これに筆者は幼態成熟♀の名を付した。タマムシ型幼虫に似るが肥満体となり口器も若干退化する。幼態成熟♀は成虫♀と形態を顕著に異にするがCAILLOL(1914)は前者を退化した単為生殖♀(degenerate parthenogenetic female), 後者を正常な♀(normal winged sexual female)としている。幼態成熟♀には興味深い生殖法がみられる。卵胎生によって4~20頭の二爪幼虫(♀)を生み出し、♂は1個の卵として生み出される(いずれも単為生殖による)。SCOTT(1941)は幼態成熟♀に♀を生み出す個体(female-producing paedogenetic larva)と♂を生み出す個体(male-producing paedogenetic larva)があることを明らかにし、それぞれの個体の卵巢の発育の過程を研究している(Fig. 3)。研究は次の点を明らかにしている。卵巢小管内で♂の卵として数

個の卵細胞が発育しても卵として生み出されるのは1個であること(染色体はnとなる)。♂の卵を生み出した卵巢は未発育であった卵巢小管と卵細胞を発育させ♀を胎生することができる(実験によって♀を生む卵巢に変わることを証明した)。多くは♀を生む個体であるが、環境や生理的な要因によって♂を生む個体が生じるとしている。

ゾウムシ型幼虫: Curculionid larva と呼ばれるこの型は胸脚が短かく、からだは著しく肥満して寄生生活型となっている。SCOTTの観察によれば卵から出た幼虫は4~5日母体に寄りそっているが、やがて母体の生殖孔に頭部を挿入して数日間で母体を食べつくすと言う。BARBER(1913)はこの時期をMetrophagous larvaと呼びゾウムシ型幼虫から区別している。この幼虫はやがて前蛹期を経て蛹となり成虫♂となる。

成虫: 北アメリカ型のものは前記の生活史からも明らかなように♂が出現するが、南アフリカ型は♂を欠くと言う(PRINGLE, 1938他)。卵からは二爪幼虫(♀)が出現するが成虫の生殖能力はまだ十分に判っていない。

III チビナガヒラタムシの形態について

LECONTE(1878)は本種をツツシクイムシ科の新種として記載した(成虫の触角、基節等の形態からツツシクイムシ科に属すると考えた)。しかし

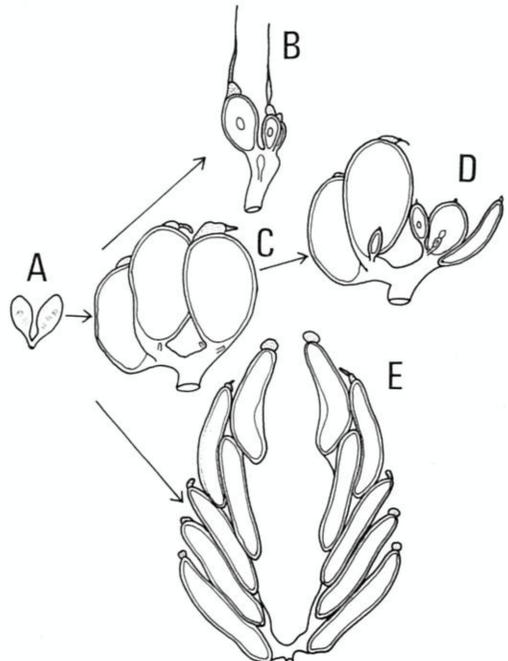


Fig. 3. チビナガヒラタムシの卵巢の発育(SCOTT, 1941から転写)。A. 未発育の卵巢, B. 成虫♀の卵巢, C. ♂の卵を生みだす幼態成熟♀の卵巢, D. ♀を胎生する卵巢への変化, E. ♀を胎生する幼態成熟♀の卵巢。

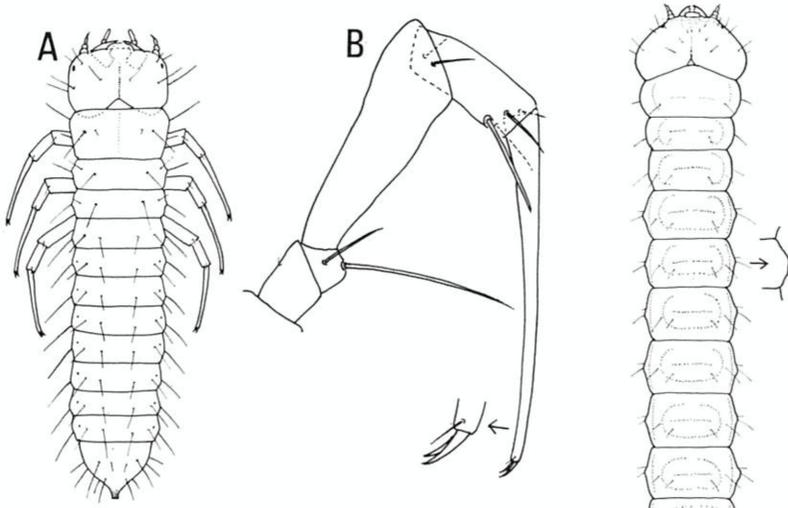


Fig. 4. チビナガヒラタムシの二戸幼虫(1齡),
A. 背面, 体長約1 mm, B. 左後脚の後面.

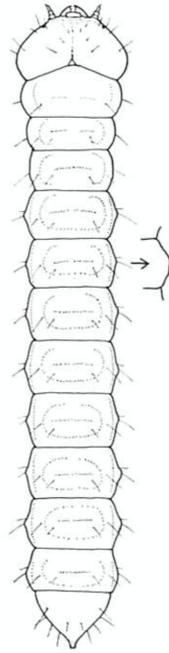


Fig. 5. チビナガヒラタムシのタマムシ型幼虫(背面),
体長約4.5 mm, 矢印は背面隆起を示す.

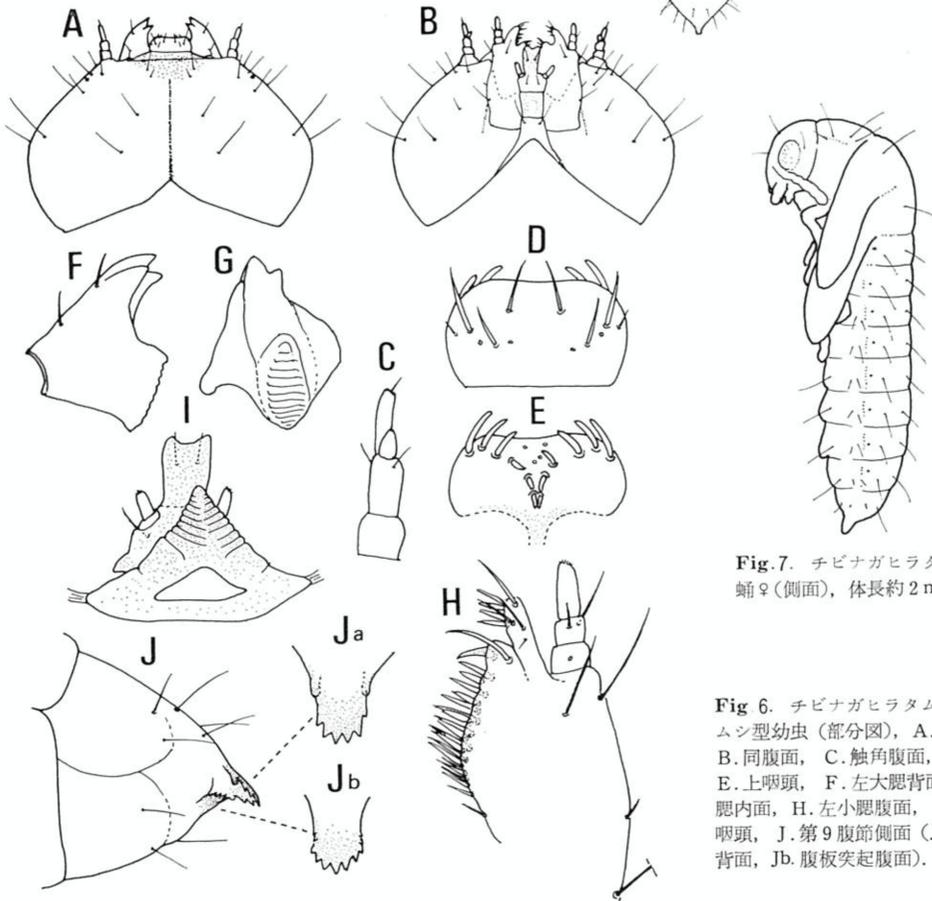


Fig. 7. チビナガヒラタムシ
蛹♀(側面), 体長約2 mm.

Fig. 6. チビナガヒラタムシのタマムシ型幼虫(部分図), A. 頭部背面, B. 同腹面, C. 触角腹面, D. 上唇, E. 上顎頭, F. 右大腿背面, G. 右大腿内面, H. 左小腮腹面, I. 下唇と下顎頭, J. 第9腹節側面 (Ja 背板突起背面, Jb. 腹板突起腹面).

本種の形態と分類上の位置についてはその後前記学者の他, SHARP & MUIR (1912), DE PEYERIMHOFF (1913), FORBES (1926), BÖVING & CRAIGHEAD (1931), VAN EMDEN (1932), MEIXNER (1935), PATERSON (1938), CROWSON (1938, 1955), JEANNEL & PAULIAN (1944), JEANNEL (1949), PAULIAN (1949), CARPENTIER (1952) 等によって考察された。

DE PEYERIMHOFF が幼虫形態から始原亜目のナガヒラタムシ科との関連を示唆し, また BÖVING & CRAIGHEAD が同じく幼虫形態からナガヒラタムシ科と本種(チビナガヒラタムシ科)を始原亜目に位置づけたことは, その後の CROWSON の研究からも明らかのように特筆すべきものである。

PATERSON (1938) は成虫形態を詳細に記述すると共に北アメリカ産(北アメリカ型)と南アメリカ産(南アメリカ型)との間に体長(南アメリカ型は2.5~2.8 mm)で大きい)やその他の形態に明確な差があることを指摘しているが別種とすることは出来ないとしている。MARSHALL & THORNTON (1963) も香港で採集された二爪幼虫と南アメリカ産の二爪幼虫とを比較し, 単眼の有無などの相違点をあげているが別種とはしていない。

A) 成虫の形態 (Fig. 1): ♀を用いた。背面は黒色でやや光沢があるが腹面は淡色。頭部は幅広く前胸背の前方とはほぼ同じ幅。複眼は顕著に隆起。触角は11節からなるが短かくやや太い。小腮鬚の先端節は紡錘型。前頭部は前方へ下降する。頭部と前胸背は平たくなめらか。頭部には少数の浅い点刻が認められる。前胸は顕著に後方に狭まり, 明瞭な背側会合線(notopleural sutures)を欠く。前胸背の前縁は弱く後方へくぼむ。小楯板は△型。上翅は薄く短く, 基部(上翅)から腹部末端までの約3/5の長さ。背面からは4~5腹節背板が露出する。各上翅は側縁と中央に1本の弱い隆起条があり, 周縁に刺毛を疎生する。下翅はradial sectorがあり, oblongumは明瞭。下翅の先をうずまき状にまいて収める。後胸前側板は中脚基節に達する。後脚基節は後胸板とゆ着せず, 第1腹節腹板を二分しない。各脛節は先端に1本の刺があり, 各跗節は5節からなる。腹部は6または7節からなり中央部はやや幅広い。末端節に1対の刺状突起がある。体長約2 mm (日本産のもの)。

B) 幼虫の形態 (Figs. 4—6): 始原亜目(ナガヒラタムシとチビナガヒラタムシ)幼虫の特徴を記せば次の通りである。頭蓋背面は1本の正中線があり, 後縁は強く内方へ湾入する。上唇・頭楯は前頭から分けられる。触角は3節からなるが細長くない。大腮は左右同形で3歯, 臼状部はよく発達する。小腮葉片は内外葉に分かれる。小腮鬚は3節。下唇は褐色に硬化し前方へ強く突出する。胴部は白色。第9腹節は後方へ細まり角質の突起に終わる。気門は

楕円形。ナガヒラタムシおよびチビナガヒラタムシ(タマムシ型幼虫)は胸部・腹部の各節は背腹両面が隆起し朽木中の移動を助ける形態となっている。なお両者は体長の他, 第9腹節末端の突起の構造で容易に区別できる(ナガヒラタムシの若齢幼虫の形態については未だ明らかでない)。

二爪幼虫(1齢幼虫)(Fig. 4): 胸脚は細長く跗節は脛節の約2.5倍。爪は2本。単眼は各側面に1個。触角の感覚突起は大きい第3節よりは短い。上唇(上咽頭), 大腮, 小腮, 下唇(下咽頭)の形および第9腹節末端の背腹両面の突起の形はタマムシ型幼虫に類似する。体長約1 mm。

タマムシ型幼虫 (Figs. 5, 6): 胸脚を欠くが, 中・後胸腹面はそれぞれ1対のふくらみがみられる。頭部は胴部よりも幅広く淡褐色。通常各側面に1個の単眼が認められるが不明瞭な個体もある。触角の第1節は他節より短い。第2節と第3節はほぼ同じ長さ。上咽頭は前縁近くに3対, 中央に3対の剛毛があるが, 前縁近くのもの著しく大きい。大腮臼状部には明瞭な横隆起を並べる。小腮鬚の第3節は最も長く, 第2節の約2倍。小腮葉片の内葉は内縁先端に1本の太い剛刺毛がある。下咽頭には前方へ狭まる三角形の大きな角質突起がある(左右に刻みがある。臼状部と咬み合うことで咀嚼を助ける器官と考えられる)。下唇鬚の第1節は著しく小さい。胴部の隆起部には微細な顆粒状突起を密に分布する。刺毛は細く目立たない。第9腹節の背腹面の突起は鋸歯状で背面の突起はやや下方へ突出する。なおこの突起の左右の皮膚が後方へ1対の尾脚状に突出し移動を助ける。体長約4.5 mm (約2 mm からこの形態のものがみられる)。

C) 蛹の形態 (Fig. 7): ROZEN (1963) はチビナガヒラタムシとナガヒラタムシの1種の蛹から原始的な形態を見出すことを試みたが明確なものは得られていない。他の鞘翅目蛹の場合と同様にチビナガヒラタムシ蛹にも成虫形態の特徴がみられる。すなわち短い触角と短い上翅。第9腹節末端の1対の突起などである。なお突起は肉質で尖らない。その他, からだは比較的細長く刺毛は目立たない。体長約2 mm。

謝辞

国立予防衛生研究所 朝比奈正二郎博士の紹介で横浜市衛生研究所 金山彰宏氏がこの興味深い標本を私の手許へ届けられた。研究の糸口をつくってくださった朝比奈博士並びに現地での調査に協力された金山氏に感謝したい。また大阪市内で採集された幼虫を送ってくださった大阪市立自然史博物館 宮武頼夫氏, 文献のコピーを送ってくださった神戸大学 奥谷禎一教授・東京農業大学 渡辺泰明助教授に対しても併せて感謝したい。

(横浜市港北区)

茨城県南部のタマムシ (その1)

大桃定洋

茨城県のタマムシ Buprestidae に関する報告としては、わずかに水戸市偕楽園におけるアオマダラタマムシ *Nipponobuprestis amabilis* VOLLENHOVEN およびクロタマムシ *N. querceti* SAUNDERS の記録¹⁾ あるいは県北地方における数種の記録²⁾ を見るだけであり、また、両記録の合計も14種を数えるにすぎない。

筆者は、茨城県南部(取手市、土浦市、筑波山)において採集する機会に恵まれ、26種のタマムシを得ることができた。これらの中には、分布上興味深いと思われるミツボシナガタマムシ *Agrilus trinotatus* SAUNDERS およびサンゲチビタマムシ *Trachys robusta* SAUNDERS の2種が含まれ、また、上記の報告^{1,2)} には見られない種(*印を付して表示)17種が含まれている。茨城県に産するタマムシに関する一知見として報告する。

1. *Chrysochroa fulgidissima* SCHÖNHERR タマムシ
1♀, 筑波山, 12. viii. 1978.
2. *Chalcophora japonica* GORY ウバタマムシ
1♀, 筑波山, 12. viii. 1978.
3. *Buprestis haemorrhoidalis japonensis* SAUNDERS クロタマムシ
1♀, 筑波山, 12. viii. 1978.
4. *Chrysobothris succedanea* SAUNDERS ムツボシタマムシ
1♂, 取手市小文間, 9. vi. 1978.
5. *Agrilus cyaneoniger* SAUNDERS クロナガタマムシ
2♂♂・1♀, 取手市小文間, 9. vi. 1978.
6. *A. discalis* SAUNDERS ヒシモンナガタマムシ
多数, 取手市小文間, 26. iv, 21. v, 9. vi. 1978 ;
3♂♂, 土浦市右靨, 1. x. 1978.
7. **A. friebi ainu* MIWA & CHŪJŌ クヌギナガタムシ
2♂♂・4♀♀, 取手市小文間, 9. vi. 1978.
8. **A. moerens* SAUNDERS ツヤケシナガタマムシ
1♂・1♀, 取手市小文間, 21. v. 1978.
9. **A. rotundicollis* SAUNDERS アサギナガタマムシ
多数, 取手市小文間, 9. vi. 1978.
10. **A. sospes* LEWIS シロテンナガタマムシ
1♀, 取手市小文間, 21. v. 1978.
11. *A. spinipennis* LEWIS ケヤキナガタマムシ
1♀, 取手市小文間, 9. vi. 1978.
12. **A. tempestivus* LEWIS ウグイスナガタマムシ
多数, 取手市小文間, 21. v. 1978.

13. *A. tibialis* LEWIS ホソアシナガタマムシ
多数, 取手市小文間, 21. v, 9. vi. 1978.
14. **A. trinotatus* SAUNDERS ミツボシナガタマムシ
多数, 取手市小文間, 21. v, 9. vi. 1978.
カン類のソダ上から得た。本種は従来、東京を北限として広く西南日本に分布³⁾ することが知られていたが、その食樹の分布から考えると、これと併行して、東京より北の地方にも分布が広がっているものと推定されていた。目下のところ北限の記録と思われる。
15. **A. viridiobscurus* SAUNDERS アオグロナガタマムシ
2♂♂・1♀, 取手市小文間, 21. v. 1978.
16. **A. sp.*
1♀, 取手市小文間, 21. v. 1978.
アサギナガタマムシ *A. rotundicollis* に似るも、内側隆線を欠き、側隆線の周囲が金緑色に輝く、体長5mm前後の未記載種。
17. **Trachys auricollis* SAUNDERS クズノチビタマムシ
1頭, 筑波山, 12. viii. 1978 ; 多数, 土浦市右靨, 1. x. 1978.
18. *T. griseofasciata* SAUNDERS ナミガタチビタマムシ
多数, 取手市小文間, 26. iv, 21. v, 9. vi. 1978 ;
多数, 土浦市右靨, 1. x. 1978.
19. **T. inconspicua* SAUNDERS ウメチビタマムシ
1頭, 取手市小文間, 21. v. 1978 ; 多数, 土浦市右靨, 1. x. 1978.
20. **T. inedita* SAUNDERS マルガタチビタマムシ
多数, 土浦市右靨, 1. x. 1978.
ムクノキの葉上から得た。西南日本に多い種で、東京より北の地方では珍らしい。現在の分布北限は東京⁴⁾ である。
21. **T. reitteri* OBENBERGER マメチビタマムシ
6頭, 土浦市右靨, 1. x. 1978.
22. **T. robusta* SAUNDERS サンゲチビタマムシ
多数, 取手市小文間, 21. v, 8. vi. 1978 ; 1頭, 土浦市右靨, 1. x. 1978.
いずれもシラカンの葉上から得た。従来、スダジイが唯一の加害植物として知られていたが、シラカンをも食することを見出したので新加害植物として追加したい。なお、本種はスダジイの分布と大体一致する九州から房総半島までの太平洋沿岸の地方および福井県までの日本海沿岸の地方に知られ⁵⁾、取手市や土浦市のような内陸部からの記録は珍らしいと思われる。北限の記録であろう。

23. **T. tsushima* OBENBERGER アカガネチビ
タマムシ
1頭, 土浦市右榎, 1. x. 1978.
24. **T. variolaris* SAUNDERS ダンダラチビタ
マムシ
多数, 土浦市右榎, 1. x. 1978.
25. **T. yanoi* Y. KUROSAWA ヤノナミガタチビ
タマムシ
多数, 取手市小文間, 26. iv, 21. v, 9. vi. 1978;
多数, 土浦市右榎, 1. x. 1978.
26. **T. sp.* コウゾチビタマムシ

多数, 土浦市右榎, 1. x. 1978.

最後に, 種の同定と種々のご教示をいただいた黒
沢良彦博士に深謝する。

文 献

- 1) 日置正義; 茨城博物同好会会誌, Vol. 10 (1938).
- 2) 川島保夫; りりぼし (水戸昆虫研究会会誌),
Vol. 1 (1973).
- 3) 黒沢良彦; 甲虫ニュース, Nos. 27/28 (1975).
- 4) 黒沢良彦; 私信。
- 5) 黒沢良彦; 甲虫ニュース, No. 35 (1976).
(茨城県稲敷郡)

○奥秩父三国峠のハナカミキリ類について

奥秩父の三国峠は長野・埼玉・群馬各県境にそび
える三国山のやや南に位置する峠(標高約1700m)
である。本来はブナ帯の原生林であるが, 長野県側
はすでにすべて伐採されておりカラマツの植林地に
なっている。埼玉県側では所々にブナの林があるが,
かなり古い時代に伐採されたらしく, そのほとんど
が高令の二次林である。それに対し群馬県側は原生
林がほとんどそのまま残っており, より標高の高い
所には針葉樹林帯も存在している。

このように, この地域は本来の原生林であるブナ
林がかなり少なくなっているため, この機会に筆者
等が同地で採集したハナカミキリ類を記録しておく
たい。

キベリカタビロハナカミキリ *Pachyta erebia*
BATES

1♂1♀, 4. viii. 1978, 斎藤採集。

オオハナカミキリ *Konoa granulata* (BATES)

1♂, 5. viii. 1978, 斎藤採集。

ブチヒゲハナカミキリ *Corymbia variicornis*
(DALMAN)

2♂♂1♀, 4. viii. 1978, 斎藤採集; 1♀, 4. viii.
1978, 岡島採集。

コヨツスジハナカミキリ *Leptura subtilis*
(BATES)

1♀, 5. viii. 1978, 斎藤採集。

以上はすべてノリウツギの花より得た。

クロオオハナカミキリ *Macroleptura thoracica*
(CREUTZER)

1♀, 4. viii. 1978, 岡島採集。

ミズナラの立枯より得た。本種は上翅の赤い個体
と黒い個体とが現れるが, 本個体は後者であり, 奥
多摩地方で採集された数頭と一致する。斎藤良夫
(1978, 埼玉県の昆虫, 埼玉県の動物誌: 213-258)
には本種の記録は見られない。

他には, チャイロヒメハナ・オオヒメハナ・ルリ
ハナ・ミヤマクロハナ・クロルリハナ・チャボハ
ナ・ヒメアカハナ・アカハナ・ツヤケシハナ・マル
ガタハナ・ニンフハナ・タテジマハナ・ヨツスジハ
ナ・フタスジハナ・オオヨツスジハナ等のハナカミ
キリ類が採集されたが, 当然採集されるべき, カラ
カネハナ・アオパホソハナ・ヤツボシハナ等は1個

体も目撃することさえできなかった。

ハナカミキリ類の他には, エグリトラ・キスジト
ラ・トゲヒゲトラ・ルリボシ・フタオビアラゲ・ヘ
リグロリゴ等のカミキリが採集されたが, この地
域の環境がこのまま維持されたとしてもこれらのカ
ミキリを採集することは年々難しくなっていくであ
らう。(東京農大, 斎藤秀生・岡島秀治)

○佐渡ヶ島産のアリヅカムシ

最近筆者は馬場金太郎博士のご好意により, 同博
士採集の多数のアリヅカムシ類の標本を検査する機会
を得た。このうち佐渡ヶ島産のアリヅカムシについ
て同定が終了したので, ここに記録して同博士の御
厚意に報いたい。

なお, 現在まで佐渡ヶ島産のアリヅカムシ類の記
録は皆無である。

1. *Batriscenaulax modestus* (SHARP)

2頭, 羽茂, 27. x. 1973, 馬場金太郎採集。

2. *Batriscenellus (Scaioscenellus) similis*
(SHARP)

7頭, 羽茂, 27. x. 1973, 馬場金太郎採集。

3. *Batrisceniola dissimilis* (SHARP) アナヅア
リヅカムシ

6頭, 羽茂, 27. x. 1973, 馬場金太郎採集。 1
頭, 水津, 9. ix. 1964, 馬場金太郎採集。

4. *Triomicrus protervus* (SHARP) マルムネア
リヅカムシ

3頭, 羽茂, 27. x. 1973, 馬場金太郎採集。 1
頭, 東野, 27. x. 1973, 馬場金太郎採集。

5. *Morana discedens* SHARP マメダルマアリヅ
カムシ

1頭, 羽茂, 27. x. 1973, 馬場金太郎採集。

6. *Lasinus spinosus* SHARP オオトゲアリヅカ
ムシ

4頭, 羽茂, 27. x. 1973, 馬場金太郎採集。

なお, 上記以外に *Petaloscopus*, *Batrissoplisus*,
Pselaphogenius, *Diartiger* の各属に含まれる種
がそれぞれ採集されているが, これらの種の形態的
特徴は既記載種と一致しないので, 今後さらに検討
を加え, 改めて報告したい。

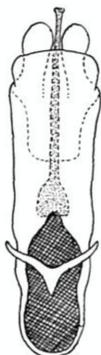
末筆ながら貴重な標本を多数御恵与され, 筆者に
よる報告を許された馬場金太郎博士に心から御礼申
し上げる。(東京農大, 田野口康彦)

○サクラムジハムシの福井県からの記録と誤報1件の訂正

サクラムジハムシ *Gonioctena (Gonioctena) morimotoi* KIMOTO, 1963 長野県軽井沢, 山梨県増富から記載されたのち, 那須, 大台ヶ原, 奈良県上北山村などから記録されているが, 次の標本を検しているため報告する。

福井県今庄町夜叉ヶ池, 1♂, 31. v. —2. vi. 1974; 福井県大野市経ヶ岳, 1♂1♀, 2. viii. 1975, いずれも筆者採集保存。

実は最初の標本は「福井県自然環境保全基礎調査報告書」(1976)に「ナガフジハムシ」として記録したもので, ここに訂正しておく。フジハムシに似て, 明らかに細長い頭蓋種で, 北隆館の大図鑑のナガフジハムシの写真にも, フジハムシとの相異を示した記載にもびびったりだったので, 安易にナガフジハムシと同定してしまった。木元の本原記載(1963)や総説(1964)を見ても ナガフジとサクラムジの決定的なちがいは, 体長と交尾器以外にないらしく, 検索表にもそれだけが示してある。体長は6.5mmで *morimotoi* の範疇に入るが念のため交尾器を検したところ, この類の中では特異な形状をもつ *morimotoi* に一致した。参考までに, 夜叉ヶ池産標本の♂交尾器スケッチを付しておく。側面から見たカーブの様子なども木元の記載や図にほぼ一致する。



夜叉ヶ池産サクラムジハムシの交尾器

同定は厳正であるべきことを充分承知の旨の研究者として, まことに赤面のいたりであるが, 誤りを正直に申上げて諸賢にお詫びしたい。

(福井大学教育学部, 佐々治寛之)

○オオシマオビハナノミの台湾および福島県下からの採集例について

オオシマオビハナノミ *Glipea oshimana* NOMURA は奄美大島産の2♀♀の標本に基いて1966年に記載されたが, 実はその最初の記録は野村(1963)による原色日本昆虫大図鑑IIで, アヤオビハナノミ *G. ohgushii* CHŪJŌ として図示されている。また, 田添(1973)がアヤオビハナノミとして福島県いわき市四倉から記録した1♂が, 何とオオシマオビハナノミに当てるべきものだった。

文献上のオオシマオビハナノミの記録は以上の3個体にすぎないが, 田添京二博士と大桃定洋博士はいわき市周辺ならびに福島市北方山地の茂庭林道にて採集されているし, 茨城県北部山地の花園周辺で採れたという2, 3の個体を久保田正秀氏に見せていただいたことがある。さらに1978年に私自身も福島県原ノ町市から2♂♂を採集することができたし, 台湾産の標本も伊藤 淳氏の御好意で検することができた。しかし, 奄美大島からは記載に使用された2♀♀だけしか私は知らない。

ここに, 私が所有している本種の標本を記録しておく。田添・大桃両博士, ならびに伊藤 淳氏に厚く御礼申しあげたい。

台湾: 1♀, 桃園県巴陵, 24. v. 1977, 伊藤 淳採集。

福島県: 1♀, 吾妻山地茂庭林道, 22. vii. 1976, 田添京二採集; 1♀, いわき市江田, 15. vii. 1978, 大桃定洋採集; 2♂♂, 原ノ町市横川林道, 16. vii. 1978, 高桑採集。

私が採集した2個体はシデの類と思われる立枯上からであり, 大桃博士が採集したものはケヤキ生木の幹の枯死部からであった。

福島県においては茂庭のように標高1000mを越すブナ帯で得られたり, 原ノ町市横川のように標高は500m前後ではあってもカミキリ相から見れば明らかに北方ないし山地型の地で得られることは, ブナ帯に多いオオオビハナノミ *G. shirozui shirozui* NAKANE の例があるにせよ, 本属の中ではきわめて異例のことである。

ところで, 台湾, 奄美大島, 福島県の各産地のものは斑紋や微毛の色に多少とも違いが認められる。これは各産地が離れている距離を考えれば当然のこととも思われるが, そのはっきりした関係については, 特に原産地である奄美大島産の♂個体を検するまでは言い切る自信がない。それは, この属のものは斑紋がよく似ていても性器が顕著に異なっているために別種だと判る例にしばしば遭遇しているからである。いずれその時が来れば特に福島県産は再検討すべきであろうが, 現時点では台湾産も福島県産の個体も奄美大島産と同一種にしておくしか仕方がない。

なお, 本種は日本産の中ではコオビハナノミ *G. fasciata* KŌNO に近いようだが, 日本と台湾のこのグループ(未記載種を含め最低6種以上を産する)の中では, 体型が細長い点からやや離れた位置にあり, むしろボルネオ・キナバル山産の1種やタイ北部山地産の種類により近そうなものがある。

(横浜市金沢区, 高桑正敏)

○大薩菩でミヤマルリハナカミキリを採集

ミヤマルリハナカミキリ *Anoploclera azumensis* MATSUSHITA et TAMANUKI (1942, 動雑, 54(2): 79) は福島県の吾妻山を模式産地として記載され, 北海道・本州・四国・九州と日本各地に広く知られるが, 分布は連続的ではなく関東周辺においては奥多摩が良く知られている。筆者は山梨県大菩薩において下記の如く本種を採集したので記録しておく。

1♀, 木賊(標高約1,000m), 13. v. 1978, 楠嘉博採集。

なお本個体はカエデ類の花上から得られたもので, 他にビクニセハムシハナカミキリ, キバネニセハムシハナカミキリ, ヒナルリハナカミキリ, セスジヒメハナカミキリ, ナガバヒメハナカミキリがコナンヤカエデ類, ニワトコの花上より採集できたのでつけ加えておく。(東京農大, 楠 嘉博)

○サビキコリがアブラムシを捕食

筆者の1人佐藤は1976年6月26日に東京都八王子の滝山城址公園において、アザミの葉上についたゴボウヒゲナガアブラムシ *Dactynotus gobonis* (MATSUMURA) をサビキコリ *Agrypnus binodulus binodulus* (MOTSCHULSKY) の成虫が捕食しているところを観察したのでここに報告しておく。



本種の食性については、リンゴや橘相等の花を食することが知られていたが、このようにアブラムシを捕食することは知られていないようである。

(東京農大, 佐藤英夫・鈴木 互)

○埼玉県初記録のカラフトヒゲナガカミキリ

カラフトヒゲナガカミキリ *Monochamus saltuarius* (GEBLER) の関東地方周辺の記録としては、福島県南部、長野県、山梨県、静岡県などがあるが、関東地方の記録は意外に少なく、わずかに茨城県水戸市周辺の記録(1 ♀)があるだけである^{1,2)}。

筆者は埼玉県下の武蔵丘陵森林公園の近くで本種を採集したので報告する。平地にはいくぶん遅い採集例であろう。

1 頭, 埼玉県比企郡滑川村, 17. vi. 1978.

当地方は赤松林が多く、本種はかなり広範囲に分布しているのではないと思われる。

1) 芳賀 馨, 1975, 瑠璃星, (3), p. 16.

2) 高桑正敏, 1978, 甲虫ニュース, (41), p. 1.

(埼玉県浦和市, 衣笠恵士)

○北海道奥尻島でコブスジサビカミキリを採集

北海道からは従来未記録だったコブスジサビカミキリ *Atimura japonica* BATES を渡島半島西方の奥尻島にて採集したので報告する。

9 頭, 松山支庁奥尻島奥尻, 2-3. vi. 1977, 秋元信一・西川直己採集。

細いツルの叩き網で得たものである。

なお、奥尻島のカミキリについてはほとんど知られていないと思われるので、同時に採集したものを次に記しておく。

ヒメスギカミキリ, アカネカミキリ, シロオビチビカミキリ, トゲヒゲトラカミキリ, シロトラカミキリ, シナノクロフカミキリ, ヒシカミキリ, カッコウカミキリ, ナカジロサビカミキリ, アトモンサビカミキリ。

採集に同行してくれた秋元信一氏に厚くお礼申し上げます。(札幌市, 西川直己)

○キボシカミキリ高知県2度目の採集記録

過日, キボシカミキリ *Psacotha hilaris* (PASCOE) の高知県初記録を本誌に報告したが, 1978年9月2日, 5日に高知~松山間を所用で往復した際に, 国鉄バスの休憩地(引地橋)にてトウグワの葉上より数頭の本種を得ることができた。なお, 今回の採集地点は, 前報の採集地点・名野川下北川より直線距離にして約2.35kmに淀川の下流に位置している。これで, 本種の分布域は更に高知県内へ広がったことになりそうである。

高知県吾川郡吾川村引地橋(標高160m): 2 ♀ ♀ ♀ 1 ♀, 2. ix. 1978; 2 ♀ ♀ ♀, 5. ix. 1978, すべて島本竜一採集。(高知市, 島本竜一)

甲虫談話会

会費(一カ年)1500円, 次号は4月下旬発行予定, 投稿メ切は3月20日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号(各号100本180円)

なお, 有頭針00, 0号もできました。その他, 採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ぱん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,400, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,400, 4個以上 ¥850 (以下同様), 第2地帯 ¥1,400, ¥950, 第3地帯 ¥1,600, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥140)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話 (03) 811-4547, 振替 6-113479